かたりべ草子　四

保元物語

hōgemmonogatari

かたりべ草子　四

保元物語

下順二が語る

Hogenmonogatari

平凡社

木下順二が語る「保元物語」
一九八四年一月一〇日　初版第一刷発行

著　者　木下順二
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
東京都千代田区三番町五番地　〒102
電話　東京（〇三）二六五一〇四五一
振替　東京八一二九六三九
印刷　東洋印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

目

次

はじめに……7

上巻

後白河院ご即位のこと……15

鳥羽法皇熊野神社ご参詣ならびにご託宣のこと……20

鳥羽法皇崩御のこと……25

新院ご謀反おぼしめし立たれること……30

官軍、ほうぼうに手分けのこと……38

親治ら生け捕られること……39

新院ご謀反ならびに調伏のこと付けたり内大臣意見をのべること……40

新院為義を召されること……42

左大臣頼長公、上洛のこと……47

天皇方の軍勢召し集められること……48

新院御所各門々固めのこと付けたり軍評定のこと……50

将軍塚鳴動ならびにほうき星が出ること……60

天皇方勢ぞろいならびに後白河天皇三条殿へ行幸のこと……62

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

中巻

白河殿へ源義朝、夜討ちに攻め寄せること……73
白河殿攻め落とすこと……82
新院、左大臣頼長公、落ち延びたもうこと……96
朝敵の宿所焼きはらうこと……102
関白忠通殿本官に帰復したもうこと……104
新院ご出家のこと……105
頼長公ご最期付けたり父富家禅定殿下忠実おなげきのこと……107
謀反人おのおの召し捕られること……109
重仁親王ご出家のこと……111
新院おんなげきのこと……113
為義降参のこと……115
忠正、家弘ら誅せられること……121
為義最後のこと……124
義朝、さらに弟どもをも斬ること……133

下巻

義朝、幼少の弟をことごとく殺すこと……137
為義の北の方身を投げたもうこと……146
新院四国の讃岐に流されたもうこと……153
左大臣頼長公のおん死骸実検のこと……160
頼長公の公達ならびに謀反人それぞれ遠流のこと……163
忠実公都へもどられること……164
為朝生け捕り、遠流にしょせられること……166
新院、御経沈めのこと付けたり崩御のこと……175
おわりに……193

口絵　御物「扇面散屏風」保元図
挿絵　原田維夫
装幀　菊地信義

木下順二が語る

保元物語

はじめに

この本は、『保元物語』の内容を分かりやすい〝お話〟に書きなおしたものではない。『保元物語』そのものを味わってもらうために作られた本である。そのものを味わってもらうためなら原文をそのまま並べればいいという理屈になるが、今から七百五十年ほども前に書かれた原文は、当然今日のわれわれには相当分かりにくい。そこでわたしが分かるように語りなおした。一種の翻訳だが、そのさい、原文の持っているひびきや調子をできるかぎりそこなわないようにとつとめた。言いかえれば、原文をむつかしいと思わないで読んでいたであろうむかしの人が、原文から感じとったであろう文章の魅力を、少しでも現代文に再現しようとしてみたということである。どこまで成功しているかいないかは、読者の判断におまかせするほかない。

説明が必要と思える部分については、必要最小限のことがらを、なるべく手短にしるしておいた。三字分ほど背の低い文章の部分である。一行あきは、どれだけかを省略して飛ばしていることを意味する。

なお、当時は人の名前を、諱または名告（義朝、為朝）で呼ばず、役名または通り名（下野守、八郎）で呼ぶことを原則としていた。だがただ安芸守といっても今日のわれわれには、それがたれのことやらすぐには分からないから、訳文では清盛という名告を適当に使った、というふうな、やむを得ぬ言いかえはいろいろとあること、ご了承を願いたい。

〝保元の乱〟とはいったいなんなのか。それがこの『保元物語』のテーマなのだから、すべては本文を読めば分かるわけだが、その本文の理解を少しでも助けるために、そもそも〝保元の乱〟とはいったいなんなのかということを、ここでできるだけ手短に説明しておこう。

鳥羽法皇と、彼によってむりに天皇を退位させられた彼の実子崇徳上皇と、この父子の仲が悪くなった。それが乱の遠因である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

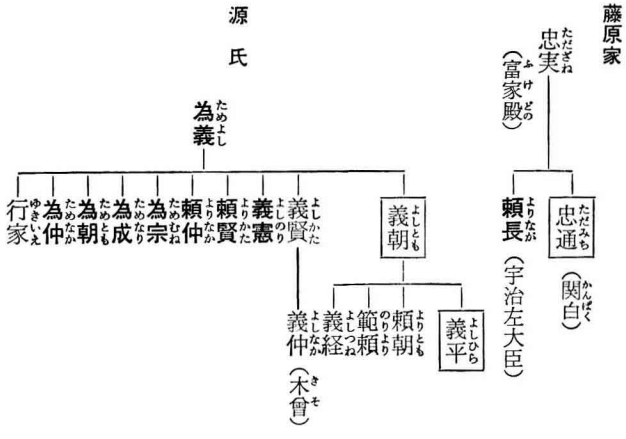
鳥羽は、崇徳のあとに、やはり実子（崇徳の異母弟）を近衛天皇とするのだが、この近衛が早死にしてしまう。

崇徳上皇は、ここで自分が天皇に返り咲かないまでも、自分の長子は天皇になるだろうと考える。

ところが、ここでも鳥羽は崇徳をのけものにして、ふたたび自分の実子（崇徳の実弟）を皇位につける。後白河天皇である。

そしてその翌年、一一五六年、保元元年、鳥羽法皇は死んでしまう。

すなわち崇徳上皇の恨みは、実の弟である後白河天皇へ向けられることにならざるを得ぬ。そして崇徳と後白河、実の兄弟である上皇と天皇のこのふたりのまわりに集まる武士団同士が苛烈な戦闘を、皇城を舞台として展開する、それが〝保元の乱〟である。しかも鳥羽法皇とその子、後白河天皇に対する、後白河の兄、崇徳上皇という、この肉親間の争いをあたかもまねるように、彼らを取りまく藤原貴族や武士団の中でも父子、兄弟、相分かれて戦うことになった。それがそうなって行く事情は、あとで本文がくわしく語ってくれるが、どういうふうな敵対関係が肉親のあいだに生まれたか、主な名前を挙げれば一〇



一一一頁の表のうち、ゴチックが崇徳上皇方、マスで囲んだのが後白河天皇方である。

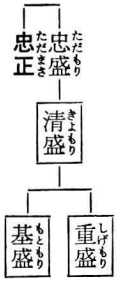
当時の同時代史として有名な『愚管抄』に、保元の乱についての有名な数行がある。すなわち日本国で、これまで王城京都以外の地で起こった戦いは少なくない。が、「マサシク王・臣、ミヤコ（京都）ノ内ニテカヽル乱」を起こしたというのは日本史上これがはじめてで「カタジケナク（みっともなく）アハレナルコト」であり、すなわち「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコ（起）リテ後ムサ（武者）ノ世ニナリニケルナリ」。

武者の世になった、というのは、藤原貴族

政権がかたむいて、武家の社会に移ってきた、ということである。

『愚管抄』の著者は慈円、天台宗の高僧だが、鎌倉初期に摂政・関白として公家政権の中心にあった藤原兼実の弟であり、古代から中世へと移るこの激動期を、みずからは滅びゆく貴族社会の中枢部にありつつ冷静にながめながらこの書を書いている。保元の乱は彼がまだ二歳のときのことだが、その三年後の平治の乱以後、清盛を中心とする平氏一族の急速な台頭ぶりを、すでにもの心づいてからの彼は十分観察しているわけで、たとえば俊寛らが鬼界島へ流された〝鹿ヶ谷の陰謀〟事件のとき、彼はすでに二十二歳である。壇の浦での平家滅亡のときが三十歳、頼朝の死のときが四十四歳、三代将軍実朝暗殺のときが六十四歳、そして承久の乱を六十六歳でながめ、七十歳で一二二五年に没している。『愚管抄』が書かれたのは承久の乱前後ということになっているが、著者慈円はその豊富な社会的・政治的体験とともに、過去、現在を客観的に見わたす視力を持っており、歴史の発展の必然的な力や法則性というようなものを彼なりにとらえていたと思われる。日本最初

平氏



の同時代史であるこの書が、また日本最初の史論書であり、日本最初の歴史哲学の書であるとされるのも、そういうことからである。だからさきほどの引用も、ただ「武者の世」になったという単なる観察報告ではなく、著者の同族が支配してきた貴族社会が終わり、武家の時代がはじまろうとしていることの、今日のことばで呼ぶなら古代から中世へと時代が移りつつある大転換期で今があるということの、彼の確認の叙述と考えるべきだろう。

ここで本文にはいるが、冒頭の『保元物語』上巻第一章の叙述は、少々ごたごたとしていて分かりにくい。それに別に名文というわけでもないから、訳す代わりに要旨を伝える文章をもってはじめるのがよかろうと考える。

上

巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.